

# 校名：東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

所在地：〒112-0002 東京都文京区小石川4-2-1

電話番号：03-3816-8952

記載日：平成28年5月19日

記載者：彦坂 秀樹

記載者役職：副園長

本園の校風、おおまかな、特色について：

## 1. 使命

本園は、教員養成を目的とする東京学芸大学にある附属学校園の一つで、隣接する附属竹早小学校と幼小一貫の教育を実現しており、同じく隣接する附属竹早中学校との連携を密にした教育を推進している。

本園は、国立大学の附属幼稚園として、以下の四つの大きな使命を担っている。

(1) 幼児の心身の発達を助長する幼稚教育を推進する

幼児の発達の特性に応じた幼稚園教育を推進し、小学校以降の生活や学習の基盤となる力を育てる。

(2) 教員養成大学の附属幼稚園として、学生の教育実習を行う

大学との密接な連携のもと、多様な教育実習のあり方について検討し、実習プログラムの研究開発を行う。

(3) 大学と連携した先進的な教育実践研究及び教員研修を推進する

教育の現代課題を踏まえ、カリキュラム研究開発を行う。また、大学と共同し、教員の資質向上をめざした教員研修を推進する。

(4) 家庭・地域社会と連携し、社会貢献に努める

家庭・地域と連携した教育支援・子育て支援活動を推進し、社会全体の教育力の向上のために貢献する。

## 2. 教育目標

「自分のしたいことに取り組む中で、友達の気持ちも考えながら行動できる子を育てる」  
具体的な子ども像として

(1) 自分なりのやり方で一生懸命取り組む子

(2) 友達と共感し合う子

(3) 自分の役割を最後まで果たそうとする子  
を目指している。

## 3. おおまかな特色

幼児が主体的に行動できる環境を通して、自主性・創造性を育て、健康・明朗で個性豊かな人格の芽生えを培うことを目標にしている。また、竹早地区附属学校園（幼稚園、小学校、中学校）の11年間の育ちを見通した連携カリキュラムの開発、実践を行っている。研究の成果として作成された連携カリキュラムについて、現在、検証を進め、本年度は、

そのまとめの年と位置づけている。このうち、幼小連携カリキュラムでは、幼小接続期を含む、幼稚園4歳児から小学校第2学年前半までを発達上同じ期と捉えている。竹早地区幼稚園・小学校では、表現・運動的な行事としてキッズフェスティバル、文化祭的な行事として竹早祭を連携して行っている他、様々な日常的な交流活動や合同活動を実践している。

**本園の卒業生の活躍状況について：**

- ①追跡調査していない
- ②中学までの進学（連絡進学）のみ分かる、情報は小学校がもっている
- ③ほぼ 100 %近くが中学まで連絡進学している。その後は主に、附属高校に進学（年度によって違いはある）

本園の勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について  
 ＊幼稚園は人事交流なし、 他大学の准教授、教授へ 等

魅力ある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みについて

## 東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

| 成長の4ステージ |  |    |   |    |    |  |    |    |  |    |    |
|----------|--|----|---|----|----|--|----|----|--|----|----|
| 校種       | 幼稚園  |    | 小学校   |    |    |  |    |    | 中学校  |    |    |
| 学年       | 4歳   | 5歳 | 1年  | 2年 | 3年 | 4年   | 5年 | 6年 | 1年   | 2年 | 3年 |
| ステージ     | 第1ステージ<br>4歳～小2前期<br><br>やりたいことを思う<br>存分やろうとする |    | 第2ステージ<br>小2後期～小4前期<br><br>集団と自分との<br>関わりにひたる |    |    | 第3ステージ<br>小4後期～中1<br><br>集団との関わりの中で<br>自分とは何かを意識する |    |    | 第4ステージ<br>中2～中3<br><br>集団の中で<br>自分らしさを追究する |    |    |

### 主体性を育む幼・小・中連携の教育

キーコンピテンシーの視点から、カリキュラムを検証する  
・道徳性・同年代性・社会性・社会生活に基礎的集団で交際する・自律性・行動力

実践研究部会

幼小接続分科会

小中接続分科会

言語グループ 社会グループ 自然グループ 健康グループ 表現グループ 人間グループ

発達研究部会

理論研究部会

調査事例研究部会

**教育実験校**

- 幼・小・中連携教育
- 国立教育政策研究所 教育課程研究指定校
- 「学びの基礎力」と「学びの芽」を育成する教育課程の開発
- 大学との連携：教科グループとの協力研究  
OECDと大学共同研究への参画

**小金井園舎との連携**

- 教員養成教育・研究
- 教育実習プログラムの開発
- HATOプロジェクト

**特色ある活動**

- 1幼～2年によるキッズフェスティバル
- 小・中学生との交流活動
- 小・中合同の竹早祭

**地域貢献**

- モデル保育の公開
- 国内外の視察受け入れ

**教育実地研究**

- 3年時基礎実習
- 4年時選択実習

## 1. 幼小中連携教育

竹早地区の幼・小・中連携研究は、1986（昭和 61）年の発足から、実に 29 年の歴史がある。その歩みは大きく 6 期に分けることができ、「連携カリキュラム」の創造をテーマとした取り組みは、その第 5 期にあたる。

第 5 期（2006 年から 2012 年）では、研究組織や運営規則といった研究体制の整備を行った。ここでの、幼・小・中各校種の文化を尊重し、配慮した研究体制づくりが、現在の円滑な研究活動を支えているとあってよい。「連携カリキュラム」の作成は、主体性の発達に関する発達研究と連携教育の実践に関する実践研究の、理論と実践の両面から取り組み、2012（平成 24）年度にその一応の完成に至った。その過程において、発達研究では、主体性の成長過程を 4 ステージ・8 ステップで捉え、まとめることができた。

2013（平成 25）年度から、第 6 期として「連携カリキュラムの検証」をテーマに研究を進めている。これは、作成したカリキュラムが本当に主体性の育成に貢献しているのかを検証し、「連携カリキュラム」を改善していく必要があるという問題意識に基づいている。2016（平成 28）年度は、その最終年度に当たり、連携教育・研究を進めるための視点を整理し、提案する予定である。

## 2. 教育課程研究指定校

平成 26 年度（1 年間）、平成 27 年度～28 年度（2 年間）と、国研の教育課程研指定を受けた。平成 26 年度の研究では、「学びの基礎力と学びの芽を育成する教育課程の編成」を研究主題に、小学校との学びの連続性を保障する幼稚園の教育課程の改定を行った。平成 27 年度からは、協同性を支える言語活動に視点を当て、幼児教育にふさわしい評価方法の開発研究を進めている。

## 3. 小学校、中学校との交流

### （1）キッズフェスティバル

キッズフェスティバルとは、幼稚園から小学校 2 年生までの園児・児童が行う行事である。幼稚園と低学年の運動会、というより、身体表現を主としたストーリー仕立ての発表会として位置づけている。小学校 2 年生がお話を創作し、幼稚園児や 1 年生がそのお話の役割を担い、



ダンスや運動を楽しむ。小学校 2 年生の児童は、友達と協力しながら自分たちの描いたお話を実現していく充実感を味わうことができる。幼稚園児は、少し上の先輩と関わりながら「次は、私たちが…」と先輩に憧れをもち、あらたな目標を持つことができる場となり、次年度のキッズフェスティバルに夢中になって取り組む原動力となっている。

### （2）保育体験

中学生が家庭科の学習として保育体験を行っている。美術の時間に制作した「幼稚園の子たちと遊ぶ道具」で一緒に遊んでももらったり、図書室で読み聞かせをしてもらったりして交流の場を広げている。



### (3) 日常的な関わり

日常的に、小学生から「〇〇の発表会をするから来てね」と声をかけられる事が多いので、必然的に、自分たちがしている活動も「〇年生を呼びたい」という願いが共有され、小学生と交流する場面が多くある。その他にも、竹早祭（学芸会、展覧会、音楽会を統合した文化的発表会）でも小学校と同日開催し、交流を深めている。

## 4. 大学・外部との連携

- ・大学の人材を活用し、幼児への美術指導、運動指導、音楽指導などを行っている。それぞれの活動は、園児たちの日常の遊びの充実を目指したものであるが、教師にとっては、より専門的な技能や指導法を学ぶ機会にもなっている。
- ・外部人材の活用としては、在園中はボランティア登録（特別な技能や知識も含め）をしてもらい、教育活動に生かしていている。卒園後も同じ地区に9年間通うので、例えば、平成27年度は誕生会でのパネルシアターの上演、音楽会の演奏（フルート、ピアノ）、園芸の専門的な指導など、卒園後も保育内容の充実にか力を発揮してもらうことが可能となっている。

### 地域において、現在、本園はどのような存在であるか

- ・モデル校として年に1～2回、地域の就学前教育機関向けに地域公開を実施している。近年、文京区には民間のこども園、保育所が新設されており、他の幼児教育機関の保育公開に初めて参加するという園に対しても様々な情報や保育について協議する機会を提供し、地域の貴重な発信源となっている。

### 附属学校の存在意義、本園の存在意義について

- ・附属小金井園舎とともに、大学と連携して開発した教員養成の実習プログラムを基に、大学の授業とタイアップした教育実習の在り方・教育実習評価の研究実践を行っている。大学での講義・演習と実習での取り組みにギャップが無く、連動した質の高い教育実習を行うことができるのは、附属幼稚園として大学と一体となった研究を行っているからこそできるものである。
- ・本園は同じ敷地内にある附属竹早小学校及び附属竹早中学校と長年連携研究を継続しており、その研究成果を毎年公開研究会を通して発表している。長年培ってきた幼稚園と小学校の接続期の在り方、小学校のスタートカリキュラムの在り方等、ますます連携教育のニーズが高まっていく中で、本園及び竹早地区の存在意義は大きいと考える。